第778号 平成22年 3 月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2010年（平成22年）
3月号（No. 778）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

「コンビニ登山」の危うさを露呈した
トムラウシ山遭難

節田重節

昨年の7月16日、大雪山系のトムラウシ山で、ツアー登山者ら10人が死亡するという大事故が起きた。その事故調査報告書が、2月24日に発表された。事故調査委員会の座長でもある節田重節さんに、調査・検証作業を通して感じた私見を綴ってもらった。

「セツダさん、ニッポンのホッカイドウの山で、たくさんソウナンしたようですよ。10人とか言ってますが、ニッポンの夏山はそんなにキケンなんですか？」

ガイドのクリスがケータイのインターネット・サイトを見ながら叫んでいる。

「ええっ、北海道で10人も遭難？どこだろう。大雪山かな？　こんな早い時期に大型の台風が来たか、雹でも降ったんだろうか」

「でも、一度に10人なんて、何があったんだろう？　冬山の雪崩ならともかく――」

昨年の7月16日、私が山仲間たちとアメリカ・モンタナ州のグレイシャー国立公園でハイキングを楽しんだ後の、夕食の席での出来事だった。

帰国後、2週間分の新聞をまとめて読んで、あらためて驚いたことは言うまでもない。夏山の一日に、大雪山系という一つの山域で10人もの死者が出るとは、まさに未曾有の大量遭難である。

その後、日本山岳ガイド協会の専務理事、磯野剛太氏から連絡を受け、「トムラウシ山遭難事故調査特別委員会」に参画することになった。長い間、専門出版社（山と溪谷社）に勤務し、日本の山登りの変遷を見続けてきたということでお呼びがかかったのであろう。

8月の現地調査に始まって聞き取りや検証作業を重ね、12月7日に中間報告を発表、さらに調査・検証し、「提言」部分を加えて本年2月24日に最終報告を発表できた。これらは「トムラウシ山遭難事故調査報告書」として冊子にまとめられ、また日本山岳ガイド協会のホームページでも閲覧できるので、ぜひご覧いただきたい。

「ツアー登山」の現状と問題点

1975年から80年ごろにかけて増え始め「中高年登山ブーム」という言葉を生んだ登山界の流れは、衰えることなく今や社会現象として定着しているといってよいだろう。とりわけ90年ごろからは、いわゆる「ツアー登山」によって山を楽しむ中高年登山者が増え、それと歩調を合わせるかのように、一般旅行会社からのツアー登山への参入も増加している。

ツアー登山は、自分の体と個人装備さえ整えられれば、あとはすべてツアー会社が準備してくれる

目　次

「コンビニ登山」の危うさを露呈した
　トムラウシ山遭難……1
エベレスト登頂40周年を振り返る……4
JAC配信の冬山天気予報が遭難防止に効果……6
会員200人超す東京多摩支部が発足……7
環境思想界の巨人、レヴィストロース……8
活動報告……9
　資料映像委員会／集会委員会／
　図書委員会
支部だより……12
　千葉支部
追悼　鰺坂青青さん……13
図書紹介……14
図書受入報告……15
新入会員……15
会務報告……16
ルーム日誌……17
会員異動……17
INFORMATION……18
山の博物館訪問……19
　裾野市立富士山資料館

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

事故の翌17日午前10時15分、トムラウシ分岐から最後の遭難者がヘリで運ばれた（写真提供＝荻野真博さん）

という、実にコンビニエンス（便利）で、お手軽なシステムである。いわば日本独特の一般的なパック旅行（パッケージ・ツアー）を山岳地域に応用したものといえる。それだけに山行計画が立てられない、ガイドブックや地図を読むのがめんどうくさい、山仲間がいない、独りでは不安で歩けない、といった初心者を中心に圧倒的な支持を受け、今日の隆盛を見ているのである。

もちろん、ツアー登山というシステムすべてを否定するものではない。登山界全体が衰退し、指導者層の高齢化や指導団体の弱体化が目立つ現状では、未組織登山者に山との出会いの場を提供し、リードしてくれている功績も見逃せない。また実際に、ツアー登山の事故率そのものは、一般登山者のそれに比べてそう高くはないのである。しかし、急成長している市場だけに、ツアー会社の企画内容やガイドのスキルに関しては問題を含んでおり、今後の課題となっている。

今回のトムラウシ山のツアーも、旭岳からトムラウシ山まで縦走し、日本百名山二つと「神々の遊ぶ庭」と呼ばれる大雪山のお花畑を満喫しようというプランである。山中は避難小屋（またはテント）利用で2泊3日、15人の登山客に対してガイドが4人（最終日のみ3人）であった。

まず私が驚いたのは、食事の貧弱さ。食料は個人持ちで、重い荷を背負った経験のない人たちだろうから仕方ないとしても、あれでは風雨のなかや2日にわたる10時間行動は厳しかっただろうと想像できる。しかも、ガイドはひたすらお湯を沸かして、それをお客に渡すだけという、インスタントで、コンビニエンスなシステム。

また、「ツアー登山では我がままを言ってはいけない」という不文律があるかのごとく、最終日、風雨のもとでの出発に際して、誰一人として異議を唱えていないこと。ツアー登山においてはガイドがすべてだろうが、それにしても、ガイド同士、ガイド対お客、同士、それぞれなにがしかの議論があって当然ではなかろうか。

「ツアー登山において、リスクをお客の自己責任とすることはできない」と言われる。確かにツアー登山はガイドやお客サイドの条件に関係なく、安全な商品として企画され、販売されなければならないだろう。しかし、自己責任は問われないまでも、同じ山岳環境での活動する以上、登山者としての自覚や自立しようとする姿勢は、求められていいのではなかろうか。

「ガイドさんが、着ろと言ってくれたら着たんですけど――」

ダウンジャケットを持っていながら途中で重ね着しなかったり、あるお客のコメントである。登山者自身の安全という最も大切なものを、そんなに簡単にシステムや他人に預けていいものだろうか。

もちろん、過去の山行経験から判断してフリースを重ね着したり、今まで一度も使ったことのないレスキュー・シートを胴体に巻き付けるなど、ひと工夫したお客もいる。そんなちょっとした努力が、恐らく生死を分けたと思われる。

ツアー会社とガイドの問題

「ツアー登山」という概念が生まれ、「ツアー登山ガイド」と「ツアー登山客」というカテゴリーができ上がっているのが現状だが、企画する会社や案内するガイドそれぞれに問題を内包している。

登山やトレッキングをツアーとするビジネスは、元もと実績のある登山家たちが始めたものである。したがって、社員にも登山経験者が多く、いわゆる「山ヤの感覚」で安全面を最優先し、企画や運営に取り組んできたはずである。しかるに、近年は一般旅行会社からの参入が増え、今回のような大量遭難こそないが、単独の死亡事故や細かな傷害事故はたくさん起こっている。

トムラウシ山のツアー会社も前身は一般旅行会社である。この会社に限らないが、中高年登山ブーム、すなわち日本百名山ブームを当て込んで、その付加価値に着目して商品化したり、他社の成功を

後追いして企画・募集している旅行会社がほとんどである。

つまり、厳しい言い方をすれば、「山」を知らない旅行会社が「山」を売っているのである。山は条件さえよければ、誰でも素晴らしい自然や達成感を楽しむことができる。ところが、問題は悪天候など危機に陥ったときの対処法である。山の実力とは、危機的状況においてこそ初めてその真価を問われるものである。

旅行会社はおいしそうな情報ばかりで、ネガティブな情報はあまり提供したがらないものだ。今回のツアーにおいても、2002年に同じトムラウシ山で起きた、台風通過時の低体温症による死亡事故のことや、エスケープ・ルートのないことをアナウンスしていない。また、山中2泊とも避難小屋泊まりを想定しているが、満員の場合はテント泊になる。幕営の経験がほとんどないであろうお客が、はたしてそれに耐えられ、翌日、あの長丁場を歩けただろうか。

などなど、このツアーおよびこの会社のツアーに限らず、安全対策を中心に検証すると企画の脆弱性を指摘されたり、見直しが必要なプランが、特に複数日にわたる縦走コースにおいて見受けられる。

一方、ガイドの数とスキルの問題もある。年間のべ40万人といわれるツアー登山客に対応できるだけの人数が確保できていないのが現状だ。したがって、ガイドのレベルも玉石混淆で、日本山岳ガイド協会の資格を持っているガイドは少なく、山好きが高じてガイドになったというレベルの人もいる。

また、ツアーで行った山の経歴がそのままその人の山歴になっているようなケースも多く、危機対応を含め実力不足のガイドが少なからずいると思われる。今回の大量遭難も、一義的にはリーダーをはじめガイド・スタッフの判断ミスによる「気象遭難」といえる。3人ともそれなりの山歴は有していたが、やはり危険予知や危機管理の能力という面から見ると、経験不足であったと言えよう。

ツアーの運営管理者としては、旅程管理義務と安全配慮義務の狭間でさぞかし悩んだことであろうが、言うまでもなく、山においては安全がすべてに優先する。

いずれにしても、ツアー登山ガイドのスキルアップと、プロとして誇りが持てるような待遇面での改善が、喫緊（きっきん）の課題である。

自然の前では謙虚であれ

「山は怖い。何十年登っていても分からんちゃ」と立山・芦峅寺の老ガイドたちがしみじみ言っていたことがある。それでもなんとかその真髄をつかみ取ろうと、山男たちは努力してきた。多くの犠牲を乗り越えて――。近年、悪天候でも強引に進む登山者が増えているように思うが、いかがだろうか。登山情報が行き渡り、装備やウェアの進歩もあるのだろうが、ツアー登山・パーティが予定どおりに行動しようとする傾向も、一般登山者に影響しているのではないか。

2009年8月28日、調査委員会が現地調査。北沼徒渉点付近で

かつては「悪天候下では行動しない」というのが大原則だった。自然に対する畏怖の念を、ほとんどの登山者が持っていたからであろう。一方、あえてインコンビニエンス（不便）な世界に飛び込んでいき、自分自身の経験や知恵、知識を試そう、あるいは磨こうとチャレンジするのが「山登り」ではなかったか。

今年の正月の北アルプス・寺地山での豪雪による遭難騒ぎに見られるように、登山者の自然に対する感受性が鈍磨し、さらに適応能力が退化しているのではないか。山におけるケータイの多用など、便利になったことによって、実は失ったものの方が、はるかに大きいのではないか、と考えている。いつごろからだろうか、これほど登山者の態度が尊大になり、甘くなったのは……。

それら諸々の感慨を含めて、われわれ登山者は自然の前では、ほんとうに小さな存在でしかないことを改めて思い知らされた、トムラウシ山の遭難であった。いろいろな意味において、やはり「山は謙虚さを学ぶ学校」である。

ヒストリー

エベレスト登頂40周年を振り返る

大塚博美

エベレスト南西壁へ

ヒマラヤの黄金時代は、ネパールが開国した1950年に、フランス隊がアンナプルナ（8091メートル）に人類初の8000メートル峰登頂の偉業を成し遂げて幕が開けられた。

そして8000メートル峰14座は、1964年までにすべて登頂された。最高峰のエベレスト（8848メートル）は、英国が1953年に33年ぶりに南側から登頂し、そして日本も1956年にマナスル初登頂の記録を登山史に残した。

日本山岳会の次なる計画は、エベレストの南西壁であった。1966年の登山禁止令によって69～70年に延期され、70年のこの隊は、スキー滑降映画の撮影隊とサウス・コルまで同じルートを採らざるを得なかった。これも国王の万博向けのプレゼンテーションともなれば、お互いに協力しなければならない。計画段階での大きなハプニングであった。

計画は以下のようなものである。一次偵察、二次ルート偵察、本隊の3つの隊で構成され、目的は南西壁を登攀し登頂、南東稜はそのサポートに当たるというものである。

一次隊は藤田佳宏隊長のもと、植村直己隊員ら4名で構成された。4年間にわたるブランクの現地、山の状況調査などに当たった。二次偵察隊は宮下秀樹隊長のもと、田邊寿、小西政継、植村直己隊員ら、それに医療8名、報道4名であった。

両隊ともに成果をあげた。特記すべきは、秋の南西壁を8000メートルまで登攀したことである。小西の異才に負うところ大であるが、リーダー陣の手腕も見逃せない。本隊・南西壁隊の準備にとって、どんなにか心強く役立ったか計り知れない。

本隊は松方三郎隊長、大塚登攀隊長ら30名に報道9名がついた総勢39名の大部隊となった。これは2つのルートに分かれるからだ。シェルパ、ポーターらが約80余名。総隊荷量30トン、キャラバンポーター約1000名。3隊で総額1億円にもなった。

準備は、南西壁登攀用の新考案の酸素器具、壁のテント台、クレバス用のジュラルミン梯子、羽毛服、シュラフ、高所靴などの装備、食料、医療、気象など、年末、船積みに向け不眠不休の大忙しであった。忘れらないのは資金の調達である。隊員の個人負担も一人30万円。会員募金、後援金、企業募金（経団連協力）、物品食料の寄贈願い。マナスルの募金活動の体験をもとに加藤本部長、松田雄一、中島寛事務局長らがまとめ上げたが、松方隊長が後始末のため1カ月遅れてBC入りした状態であった。

第1ステージ　3月25日～4月12日

アイスフォールの突破と荷上げ。4月5日、立ち上がりで大氷塔の崩壊でスキー隊のシェルパ6名が埋没、遭難する。前後に藤田パーティ、松田パーティとそれぞれ同じルートを登るが、紙一重の差で難を逃れる。「足元の氷塊が揺れ動くなかを逃げ回った」と、藤田は恐ろしかった模様を述べていた。

5月に入ってハイポーターが下部でブロックの崩壊で頭を打たれて埋没する。救助するがダメであった。ナムチェ出身のいい人間だった。ルクラで茶毘、奥さんと子ども3人、痛恨事で言葉もなかった。このアイスフォールは登山ルートではない。危険を覚悟のうえでの登山だった。

秋の二次偵察のとき、シェルパがアイスフォールから遺品を拾ってきたが、そのアノラックの腕に星条旗のワッペンが付いており、1963年の縦走に成功した米国隊のブライテンバッハのものであることが分かった。7年経って発見されたのだ。

第2ステージ　4月13日～28日

南西壁8000メートル到達、南東稜サウス・コル到達と荷上げが目標。

隊員、シェルパともに高度障害が出て不調相次ぎ、戦力ダウン、隊員のスリップ事故などもあり、スケジュールは10日遅れた。

4月21日、成田潔思隊員(28)が心臓麻痺により急死した。若く頑健な隊員だっただけに、驚天動地

だ。成田は、BC入りから風邪をひき、順応行動が遅れたが、アイスフォールを無事通過し、14日にC1（6150メートル）に入る。荷上げの拠点で仕分けの仕事を手伝い、住吉仙也ドクターに自分も上に登らせてくれと懇願する。この日は空身でシェルパとアンザイレンしてABC（6500メートル）往復へ。ここで私や隊員に元気にあいさつして下っていった。

6時の夕食時、成田ら6人は住吉ドクターのテント内で食事を始めたが、成田はあまり食欲がなく、おじやを半分ほど食べたときだった。にわかに容態が変化し、成田と呼んでも反応がなく呼吸停止、ただちに酸素吸入などあらゆる手をつくすが、8時50分、死亡が確認された。成田の遺骨はクムジュンの松方隊長のもとへ。そこでヘリコプターによって、カトマンズの成田の父上に手渡された。

松方隊長から励ましのメッセージをもらい、修羅場で仏に出会った気持ちになる。「まだ日にちはある、焦らずにじっくりと……」この切所（せっしょ）に立ってもいいささかもたじろがず、ふんばってやろう。成田の冥に応えるには登頂しかない。

5月4日～12日

第3ステージ

南西壁登攀続行、そして南東稜登頂。

一次～二次隊とも散々の目に遭い、打ちのめされしごかれた。荷上げ管理のロジスティックスは混乱し、隊員は半数、シェルパは3分の1がダウンした。ドクター側から更なる休養の強い意見があったが、私は酸素の積極使用で短期の決着方針を採った。

南東稜からの第一次登頂隊を、松浦、植村、サポートは河野、シェルパ5名と発表される。

南西壁隊は、小西隊長ら8名が、5月20日までがんばった。小西の登攀メモ「逆層でグレード4級ぐらい、極めて悪く落ちそうになる」。加納のメモ「順層で快適なクライミング」と、複雑なルートを物語っている。

5月10日、C4（7500メートル）から加納、嵯峨野は酸素を使い、ザイル9本（900メートル）を持って登る。乱雑な45度の岩場、アイゼンを脱ぎ素手で登る。行く手に高さ10メートル、長さ100メートルくらい、魚の背びれに似た岩峰の左雪田に入る（二次偵察は右に入る）。トップを嵯峨野に代り、それほど難しくない階段状の岩場を左にトラバース気味に登って3ピッチ延ばすとザイルがなくなった。C4に下ると田村、中島がC3から登って待っていた。状況説明のとき、落石が中島の右膝に当たり負傷。「しまった！」と無念の思い。加納も下山中にC3付近で腰に落石を受け、有望な2つのパーティを失う。

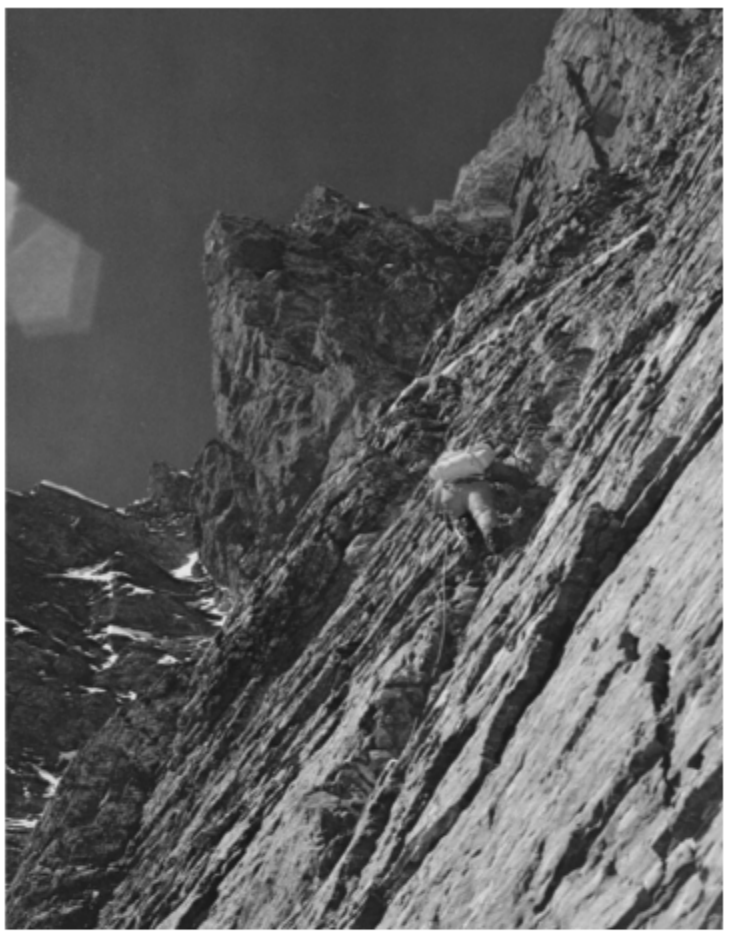
5月12日、南東稜の完全登頂をもって南西壁の断念を宣言した。

南東稜は、快晴に恵まれた5月11日、松浦・植村がC6（8450メートル）を6時10分スタート。頂上まで3時間、以降順調に下り、17時30分、ABCへ。12日、同じく平林・チョタレが無事登頂。ネパールに敬意を表す。

エベレスト登山隊の結論は、第一目的である南西壁登山の失敗、事業（6番目の登頂国など）としての成功と、ひと言でいえばこうなる。登山には、「たら、れば」はない。同じ釜の飯を食い、厳しい体験を共にした友人をもった事、これを持ち帰ってそれぞれのグループの肥やしとした。小西政継、植村直己がその一番のモデルではないだろうか。

その後、南西壁は1975年秋、イギリスのクリス・ボニントン隊が初登攀した。また1993年には日本の群馬県山岳連盟隊が冬季初登攀、18日の短期間で三次6名が登頂する。登山は常に先蹤者の肩を超えていく。

そのエベレスト登頂40周年を記念して、4月24日、「ザ・エベレスト・デイ」が企画されている。詳細は18ページ参照。



逆層の南西壁の岩場を登る嵯峨野隊員

トピックス

JAC配信の冬山天気予報が遭難防止に効果

古野　淳

日本山岳会は、一昨年の年末年始、1カ月限定で冬山の天気予報を、北ア北部、南部、八ヶ岳の3エリアに限ってインターネット、携帯電話で試験的に配信を始めた。昨年はゴールデンウィーク中も配信、会員の評判もよかった。そこで昨年末も同様に配信、冬山天気予報の登録数も1654件となり、北アルプス、八ヶ岳の冬山登山者には広く認知されてきたようである。

気象予報士の猪熊隆之氏は、年始の悪天予報を、一般の天気予報にはない山ヤ視線の強い口調で警告を出している。

12月30日15時配信の概況は、以下のようなものであった。

「1日にかけて低気圧が発達しながら通過し、冬型が強まるため、大荒れの天気となる。稜線での行動は不可能に近く、山麓でもテント除雪に追われるでしょう。

31日は、強い冬型の気圧配置となり、500ヘクトパスカル面でマイナス36度C以下の寒気がかかる。このため、終日風雪が強く、午前中と夜を中心にドカ雪となる。1日朝までの降雪量は最大120センチで、吹き溜まりではこの2倍程度積もる所もある。表層雪崩に厳重な警戒が必要。風は稜線で午前中、最大22メートル前後、のち午後は12～14メートル、夜18メートル。

1日は、強い冬型の気圧配置が続き、午前中まで500ヘクトパスカル面でマイナス33度C以下の寒気に覆われる。また、上層の谷が抜けて風は一層強まり、このため、終日暴風雪となる。また、2日朝までの降雪量はさらに最大80センチに達する。表層雪崩やテントの埋没に厳重な警戒が必要。終日、25メートル前後の風で、最大風速は27メートルに達する」

この予報のとおり、実際の年末年始の山岳気象は大荒れとなった。この冬山天気予報を見ていなかったのか、無視して突っ込んだのかは不明だが、涸沢岳西尾根で1名死亡、2名不明という遭難事故も発生した。黒部五郎岳ではガイド山行で、7人がヘリコプターで救出されている。

一方で、上記の天気予報を見て多くの登山者が年内に途中下山したようだ。利用者から寄せられたいくつかのメールを紹介しよう。

「ただ今、下山いたしました。せっかくお休みをいただきやる気満々で挑んだものの、猪熊予報のお陰で翌日以降の大荒れにビビり、本冬山は明神東稜から槍までの縦走に終わってしまいました。屏風、前穂東壁、滝谷、槍の登攀はまた次回にお預けです。皆さま、よいお年を！」

「年末は剱岳に入っておりました。29日にアタックをして30日のうちに早々に下山しました。JACの予報を大いに参考にしたことは言うまでもありません。昔は高層気象を参考にしましたが、作成が大変でした。JAC予報、これからも期待しております」

山岳専門の気象予報士が発信した天気予報によって、退路を絶つような冬山の行動を戒め、結果として未然に遭難を回避できたということであろう。携帯電話は山中で圏外の場合も多いが、ドコモでは槍ヶ岳と常念岳に、積雪期を除いてアンテナを設置。今夏には北岳への新設も検討中とのこと。au、ソフトバンクとも、積雪期も通話エリアは毎年拡大している。今後とも効果が期待できるだろう。

今年もゴールデンウィークには、4月23日から5月8日までの間、3エリアについて春山天気予報を配信する。その他のエリアについては、猪熊氏のメテオテックラボ社より月額315円で、全国15エリアの天気予報を携帯ウェブとメールで配信される。

トピックス

会員200人超す東京多摩支部が発足

高橋重之

日本山岳会東京多摩支部が2月20日、全国29番目の支部として発足した。八王子、立川、町田など多摩地域在住の会員が入会、最終的には関西、東海などに次ぐ大きな支部になる見通しだ。分境嶺踏査計画に大きな反響があった。

設立総会・祝賀会は、立川市のザ・クレストホテル立川で開かれた。神崎忠男副会長・支部活性化担当を議長に議事を進め、支部規約案、事業計画案、予算案などを設立準備委の提案どおり承認。支部長に竹中彰氏を選任した。

2月20日、110人ほどの会員が集まり、設立総会が開かれた

名称を「東京多摩」とした。「多摩」だけでは、全国的に知名度は高くなく、「東京」を頭につけた。通称は「多摩支部」。区域は東京都の23区を除く地域。在住する日本山岳会会員は423人。うち設立総会開催までに202人が入会、総会には110人が出席した。

来賓として挨拶した尾上昇会長は「4つのお願いがある。支部を盛り上げてほしい。支部の事業に積極的に参加しクラブライフを楽しんでほしい。仲間を増やしてほしい。『山の日』制定運動に協力してほしい」などと語った。

主な事業計画は、4月12日、多摩のさくら「滝山城址自然公園」ハイク。4月17日、お花見山行「美の山」桜と温泉ハイク。5月8～9日、山菜山行・新潟「八海山」周辺。6月14日、花ハイク「赤城山」などと続く。発足したばかりなので、お互いに顔馴染みになることを期待した山行だ。海外登山は、6月18～20日に韓国「北韓山」。

山行だけでなく、5月10日には、日本人エベレスト初登頂40周年の記念の年として、支部会員による講演会「エベレスト登山1970年E峰登山隊」などを予定。

特別プロジェクトとして都県分境嶺踏査を企画した。東京都と埼玉、山梨、神奈川県との分境嶺を踏査する。雲取山をはじめ三頭山、酉谷山など多摩の山を巡る。一般の人たちも参加してもらって、その際、距離と高低差でポイントをつけるマイレージ・ラリーを楽しみたい。多摩から始まって日本海まで日本を縦断する構想も。

年会費は2000円とした。還部から1人当たり1500円が元されるので、あわせて1人当たり3500円が支部運営・活動費となる。新しい執行部を中心に、これらの計画・プロジェクトを具体化させ実行していく予定だ。

設立総会のあと、祝賀会を開いた。93人が参加した。例年の年次晩餐会のように大きなテーブルに、それぞれに山の名前をつけたプレートを配置した。多摩らしくメインは雲取山。周囲を高尾山、御前山、棒ノ折山などが囲んだ。

多くの支部からお祝いに来ていただいた。広島、東海、山梨など。祝電も多数いただいた。会は和やかに、にぎやかに盛り上がった。支部会員になったばかりの会員が一人ひとり紹介され、大きな拍手で歓迎された。この日を記念し、多摩支部の名がはいったグラスを用意。分境嶺マップを展示し、特製ワインなどグッズも販売した。翌日の記念山行は、日ノ出山から吉野梅郷。

多摩支部の設立が、朝日・読売新聞に掲載された。地方版ながらトップ扱い。いずれもが都県分境嶺踏査をとりあげた。三渡事務局長宅には電話が殺到した。フランスの「ミシュラン」がガイドブックに高尾山を三つ星に紹介したこともあって、多摩地域では山登りがちょっとしたブームとなっている。高尾山にもの足りない人が、分境嶺踏査に興味を持ったのかも知れない。地域の人たちとの交流を楽しみとしたい。

オピニオン

環境思想界の巨人、レヴィストロース

橋村一豊

2009年10月30日、クロード・レヴィストロースが100歳の誕生日を前にして、中仏リネロルの居宅で亡くなった。フランスの国民から、高い信頼と敬愛を受けた思想家であった。

私は、環境哲学で最もすぐれた思想家はレヴィストロースと梅原猛ではないかと思っている。そのすぐれた点をいくつかあげ、私たちが自然に対するときの行動指針について考えてみたい。

1・世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう。

2・人間は創造物の支配者ではなく、受益者であって、自然界における行動には限界と制限がある。

3・人が生存の糧として他の生物を殺すことはやむを得ないとしても、その生物が属する種まで消滅させることは許されない。

4・効率を追求する西欧中心の近代科学は「飼いならされた思考」であって、これと同調しては、人にも他の生物にも未来はない。

5・人間は豊かな生態系から「生態系サービス」を奪取しつづけ、何も返してこなかった。その結果、自然自身による野生回復ができないところまで自然破壊が進んだ。

6・ある種の消滅が、私たちの手では埋めきれない空白を創造体系（生態系）の中に生み出してきた。この点で人間の権利は他の生物種の権利によって制限を受ける。人類に認められた権利は、他の存在を脅かすようになれば消滅する。

7・生物としての人間の自由は、他の生物種の権利を認めることで、自由獲得と同時にすぐ制限を受ける。人がさまざまな社会の豊かさと多様性を破壊し、数えきれないほどの生命形態を破壊してきた最近の2世紀においては必要な原理。

8・西欧中心の近代科学によって人が自然支配に走る現代は、自然資源採取のお返しをせず、一方通行型物質フローで、人間にのみ価値を認め、他の資源・生物はその使用価値のみを評価する人間中心主義である。これを生命中心主義、万物平等の考えに切り替えなければならない。

9・梅原猛は言う。山川草木悉皆成仏。気象・土石・水などの環境要素すべてが山川に、生きとし生けるものすべてが草木に、それぞれに平等に神々が宿っている。等価値の要素であって、人間もその一つに過ぎない。人間以外の生命、環境を大事にしろというのが、山川草木悉皆成仏である鎌倉時代の天台本覚論で確立された思想で、自然保護の根本もここにある。

10・レヴィストロースは熱帯ブラジルのナンビクワラ族の社会で長期生活し、未開社会の婚姻と近代社会との比較などを行い、文化には共通する不変の基本構造があるとし、名著『構造人類学』に結実した。その知見から現代文明が進んでいる方向の誤りを警告し続けた。彼は文明の枠を突き抜け、「自然の中の人類」という考え方で思想を展開した。

11・マルクス主義は歴史を不可逆的な時間の進行ととらえられているが（AはBに変わり、BはさらにCになりDになるの類）、レヴィストロースは、AはBになりBはまたAに戻ることもある可逆変換だとした。冷戦からポストモダンへの世界の変化の解明に、その無力ぶりを露呈したマルクス主義に代わって、彼の構造主義は有効な思想として活用された。

12・レヴィストロースの構造主義はマルクス主義や、サルトルの実存主義と鋭く対立したが、これらをすべて克服して、世界思想界の大きな潮流を形成した。またアメリカの環境思想、自然保護界にも大きな啓発を与え、ヘンリー・ソロー、レイチェル・カーソンらに広い視野を与えた。

13・レヴィストロースについての研究書や論文の量は、人類学者について書かれたものの総和を上まわるとされる。そのうち、日本語で読める主著3冊の題名をあげる。『悲しき熱帯』（1995年、川田順三、中央公論社）、『構造人類学』（1958年、荒川幾男ほか、みすず書房）、『野生の思考』（1962年、大橋保夫、みすず書房）。

これらの書物によって、自然保護の思想を、そして人間中心主義と生命平等主義の違いを深く考えてみてはどうだろう。それがディープエコロジーである。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

資料映像委員会――半世紀ぶりの額縁修復

資料映像委員会では活動の一環として、当会で所蔵している絵画の額縁修理を行なっている。

額縁の木枠は掛けられている部屋の急激な温湿度変化によって収縮・膨張を繰り返す。その結果、接合部が徐々に緩み、次第に隙間ができて、ついには分解の憂き目にあうことがある。そのため、兆候が見られた際には締め直し等補修をすることが肝要である。

平成21年度は、集会室内の壁に掛っているシュラギントワイト1861年作「シッキム・ヒマラヤのカンチェンジュンガ遠望」の額縁の欠損部補充と額縁の締め直し、ならびに集会室入口脇に飾ってある足立源一郎1959年作「北穂高岳主峰」の破損したガラスの入れ替えと額縁の締め直しをすることにした。

委員会ではここ数年、外神田5丁目の弘雅堂に額縁修理を依頼している。

2月19日の夕刻、ルームにて納品時の立ち会いをした際に弘雅堂主人の吉井宏之氏より興味深い業務報告を受けた。私一人が独占するのはもったいないので、会員諸氏にもご披露したい。

シュラギントワイトの額は1967年7月、当時の松方三郎会長から会が寄贈を受けたものである。吉井氏によると、じつは約50年前に同氏の工房で額の製作が行なわれたというのである。その額を古株の職人さんが覚えていたらしく、半世紀ぶりの対面となったのだ。

額の裏に貼られているシール

額の裏に貼ってあるシールにはローマ字で〝YATAYA〟と表記されている。これは〝八咫屋〟（18 94年創業）という西銀座8丁目の老舗である。5～6年前に当主が亡くなり廃業してしまったが、当時、業界では草分け的存在であった。また、19の後下2桁を手書きで書き込む年次欄には60とあり、1960年に納品したという意である。つまり、当会が松方氏から寄贈を受ける7年前に特注がなされたということになる。

弘雅堂では吉井氏の祖父の代から額縁の木地（木枠のこと）の仕事を八咫屋から請けていた。この額縁の材質は北海道産もしくは青森県産の楢材で、当時では最高級品であったはずとのことだ。作品を固定するマット紙に特徴があって、窓のまわりに引かれている数条の罫線は英国の影響を受けた形式で、すべて総手描きになっている。これがこの店の売りであったのだろう。

松方三郎氏のこの作品に対する熱い思いが伝わるいい話ではないか――。

過去の事情を知らずにお願いした仕事ではあったが、偶然にも元の製作者の手に里帰りしたことになった。

資料を通じて旧蔵者の眼差しまで学べるのは、委員冥利に尽きる。図らずもこのような機会に恵まれ、この先、委員会活動を続けていくよいモチベーションになった。

（中野守久）

集会委員会――

スキー懇親会に参加して

昨年の晩餐会懇親山行に参加し、スキー懇親会の話を聞いた。

ここ数年できなかったスキーを楽しめ、スノーシューハイキングもできることを期待して参加した。名古屋からは現地集合・解散が好都合でもあった。

1月15日14時ごろ、宿の雷鳥ヒュッテに着く。足慣らしで宿のすぐ前の白樺ゲレンデで7回リフトに乗ったが、まずまずのスキーの滑りで楽しめた。

雷鳥ヒュッテは槍ヶ岳山荘直営で、八方尾根ゴンドラの乗り場近くにある。夕食後の懇親会では参加者20数名で酒「白馬錦」をいただきながら、山とスキーの話を楽しんだ。北鎌尾根ルート槍ヶ岳登山のビデオも上映された。私も学生の時に岳友会の仲間と登ったことがあり、懐かしく思った。

翌16日は、スノーシューハイキングに参加することにした。メンバーは集会委員長はじめ5名。ガイド役は南岳小屋支配人の坂本さん。コースは雨飾山の麓、小谷温泉から鎌池へ登るコースで、車で小谷温泉山田旅館まで行く。

まず、雪に埋まった場合に位置を知らせるビーコンを肩にかけ、スノーシューをはいて、山田旅館裏手から登る。2メートル以上の積雪があり、急斜面を登れるだろうかと思ったが、坂本さんが胸まで雪に埋まってラッセルを始めた。少し登ると急になり、雪崩が心配になった。下が凍っていないから雪崩れることはないとのこと。

メンバー全員がラッセルを体験するため、6人が交代でトップに出て登る。後ろを歩くのは楽だが、トップでラッセルするのは大変だ。胸まである雪を掻き分けて、一歩を出す。10メートルも登ると、息がきれる。6人が登ったあとには、深さ約1メートルの道ができる。こうして2時間登ると、昼食をとり、さらに30分ほど、ブナの木に大渚山登山道の標識があった。枝には雪の塊がのっている。その上はきれいな青空だった。苦労して皆で掘った雪道を15分足らずで下った。スノーシューによる山登りは体力と、チームワークが大事だと思った。山田旅館で温泉につかり、雷鳥ヒュッテへ戻った。

夕食後、槍ヶ岳山荘の三代目穂苅康治さんから槍ヶ岳山荘の話、岳沢小屋再建の話などがあり、『芥川龍之介の槍ヶ岳登山と河童橋』という本をいただいた。

八方尾根雷鳥ヒュッテ前にて全員で記念写真

17日、八方尾根ゴンドラに乗り、上で写真を撮った。雪山の体験と楽しい懇談の機会を与えていただいた集会委員会の皆さんに感謝して帰途についた。

（鬼頭良吉）

カウアイ島・マウイ島トレッキング

1月20日、参加者22名は、大寒の日本を発ち常夏のハワイへ。

ダイヤモンドヘッドと青いワイキキの浜辺を機中より見下ろしながら、まずはカウアイ島へ。雨の多いこの島は、長い年月を経て深い渓谷や断崖、無数に入りこんだ海岸線など美しいトレイルが多く、特有の植物や鳥類の生育地でもある。いろいろな木の実や果実を鳥のように啄（ついば）みながらのスリーピングジャイアンツ・トレイル。「太平洋のグランドキャニオン」と呼ばれる壮大なワイメア渓谷。甘い香りのする深い森から、切り立った断崖まで下るアワアワプヒ・トレイル。そして、海岸線まで一気に下るカララウ・トレイル。歩きごたえのあるカウアイ島の豊かな自然を堪能し、マウイ島へ飛んだ。

マウイ島の魅力は、なんと言っても島のシンボル、ハレアカラ国立公園と裾野に広がる鬱蒼とした森である。円周34キロの大クレーター内には赤茶けた火口が連なり、月面のような異世界の様相に、底知れない岩漿のエネルギーを感じ、立ちすくんだ。噴石丘のトレイルから一気に700メートルをクレーターに下りトレッキングする。

ハレアカラのフィナーレ、サンセットを待つ。3050メートルの頂から寒さに身を寄せ合って見た荘厳なサンセット。見る限りの水平線が、いつまでも美しいオレンジ色

に染まっているのに見とれつつ山を下った。

最終日は、車窓からホエールウォッチングを楽しみながらポリポリトレイルへ。ユーカリやアメリカスギ・松などレッドウッドの芳しい香りに疲れを癒す。明るくのびやかなハワイの、豊かな自然と大地を満喫した6日間が終わった。

最後の晩餐は本場のウクレレの演奏とフラダンスにつられ、皆総立ちで歌いながら踊りの輪が広がった。山旅のよろこびを共有した仲間と、いっぱいの思い出をくれたハワイに、アロハオエ！

鳥になり風ともなりて歩みゆかむ
森のかほりに身をゆだねつつ

見はるかすクレーターいくつ万年の
神の作りしただなかに立つ

フラダンスの舞ひに酔ひつつ酌みかはす　ワインは旨し旅の終わりに

（谷口敏子）

図書委員会

第27回図書交換会

今年度の図書交換会は、例年の倍に近い600冊の出品があったので売れ残りを心配していたのだが、蓋を開けてみれば65名の事前申し込みがあった。そして、3月6日に交換会を開催したところ、当日の参加者を合わせると合計100名近い申し込みになり、22冊を残してほとんどを完売することができた。

今回の一番人気は坂本直行のサイン本『開墾の記』と『山・原野・牧場』で、ともに17名の申し込みがあった。坂本直行の本は毎回人気が高い。

武田久吉の直筆サインがある『明治の山旅』は、二番人気で16名の抽選となった。「武田さんは怖い人だったけれど、字はあんがい普通だね」とは参加者の弁。中尾佐助著『ヒマラヤの花』が次に続いた。また今回は、『画文集 山の声』や『山からの絵本』など、辻まことの著作が10点出品された。足をとめてページをめくり、辻まことの世界にひたる参加者も多かった。

その他では、『新選復刻・名山図譜』（谷文晁）、『新選復刻・山岳礼拝』（中村清太郎）、『山の画帖』（茨木猪之吉）なども人気が高く、坂本直行や辻まことの本も含めて、画文集や画家の著作に人気が高い傾向が感じられる。もちろん山崎安治著『日本登山史』などの定番ものは昨年に続いて人気本だ。

全集ものは一括購入申し込みを優先させたため、完売できたのは幸いだった。特に『復刻・日本の山岳名著』全24点には、7名から一括購入の申し込みがあったのは嬉しい誤算だった。あまりに価格を安くしすぎて、版元に申し訳なく思っている。

さて、入札本の入札額を報告する。それぞれ最高入札額は、『辻まこと　山とスキーの広告画文集』1万円、『辻まこと　山で一泊』1万円、『山を想へば』1万円、『遠い山　近い山』9800円、『アルプスと人』8000円、『けものみち』1万2800円。

『けものみち』（鳥見迅彦著）は詩集だが、知る人ぞ知る蒐集家の垂涎もの。8名から入札があり、上位3位の入札額は1万2100円、1万2500円、1万2800円の僅差の接戦となった。その最高額の入札者は、当日に会場に駆けつけての入札で（もちろん他の入札額はわからない）、結果が発表されると、そのギリギリの入札額に会場から拍手が起きた。金額がどの程度に落ちつくのか……、本に対する知識と勘を競いあう入札の醍醐味を目の当たりにすることができた。ちなみに、3位の1万2100円という入札額は、1万2000円の入札があるだろうという予想の上に立っているわけだ。

今年も三島市の長田義則会員からミカンとイチゴの差し入れがあった。「楽しみに待っていた」との便りが何通も届いた。そんな声を励みに来年もぜひ開催したい。

（三好まき子）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

千葉支部

香取市で「伊能図」の講演会
―200年前の日本を旅す

日本山岳会茨城支部長で元国土地理院長、日本測量協会副会長の星埜由尚さんの講演「伊能忠敬の見た日本の景観」が1月24日、忠敬の古里・香取市の佐原中央公民館で開かれ、100人近い参加者が郷土の偉人の話に聴き入った。

講演会は日本山岳会千葉支部と香取市の共催。最初に千葉支部の篠﨑仁支部長が「佐原は日本地図の生みの親、伊能忠敬の古里。今日は興味深い話を十分楽しんでください」と話した。続いて地元の宇井成一市長も「忠敬翁は偉大な郷土のかがみ。文化と歴史のある佐原だけに、忠敬翁の足跡をたどることはそのまま香取市の生い立ちにつながる」とあいさつした。

星埜さんは「忠敬さんの伊能図は、科学的・統一的・系統的に実測された我が国初の日本地図であり、天文観測を行ない、我が国の位置を地球上に位置づけた初めての地図でもある」とし、伊能図について「江戸時代後期の日本の自然・社会を描いた国土の記録で、これを読み解くと200年前の日本の景観の一端を知ることができる」と話した。

「伊能図」について講演する星埜由尚氏

参加者たちは「伊能図」のスライドや星埜さんの話に熱心にメモを取りながら、耳を傾けていた。

講演後、千葉支部の参加者たちは、地元有志の案内で伊能忠敬記念館や、江戸情緒が残る歴史的建造物群の小野川沿いの佐原の町並みを見学。その後は利根川水運とともに早場米地帯として栄えた江戸時代の当時から「飯の大盛り」で知られた食堂「桶松」で懇親会。ここにも足を運んでくれた宇井市長や田山市議会議長、谷田部県議会議員、JAC宮崎紘一副会長や地元有志らと日が暮れるまで楽しいひとときを過ごした。

講演会は、講師の星埜さんが伊能忠敬研究会の代表を務めているということで、香取市の全面的な協力を得て実現した。（三木雄三）

■『山岳』の発行日　6月に繰り上げ

今年の機関誌『山岳』第百四年(2010年)の発行予定を6月に早めます。登山報告などを最も適切なタイミングでお届けするためです。このため原稿締め切りは4月20日となります。

出稿をお考えの方は、内容などを早急に編集委員会に連絡してください。ワープロでの出稿をお願いします。

（山岳編集委員会）

追悼 OBITUARY

多くの人に愛された鰺坂青青さん

今村千秋

当会の前副会長で、理事や常任評議員、それに資料映像委員会の委員を長年務められた鰺坂青青さんが、この1月24日、甲状腺ガンでご逝去されました。まだ76歳の若さでした。

鰺坂さんは1959（昭和34）年立教大学を卒業、読売新聞社に入社。写真部員として当時相次いだ山岳遭難事件などを現場に出て取材しました。

その後1969～70（昭和44～45）年、「三浦雄一郎氏のエベレストスキー大滑降」の取材。1975（昭和50）年は「日本女子エベレスト登山隊」に同行、田部井淳子さんの女性初の登頂を取材し報道。1988（昭和63）年はチョモランマから世界初のテレビ生中継を実現させた、「日本・中国・ネパール三国チョモランマ登山隊」、1991～92（平成3～4）年には「ナムチャバルワ日中登山隊」と、当会の大規模なヒマラヤ遠征隊に読売新聞社の同行取材記者として参加しました。長期間の過酷な取材環境のなかにありながらも、出身母体の違う個性の強い隊員の間で、持ち前の優しい温厚な人柄で若い隊員たちの融和に大きな存在感を示していたと聞きます。

資料映像委員会では、理事・委員として活動されました。理事就任中に「資料委員会」と「フィルムビデオ委員会」が統合され、新たな「資料映像委員会」が誕生。プロの多い委員会のなかにあって、それまでの経験と持ち前の人柄で、2つの委リーダーシップを執り員会のノウハウを活かした講演会や訪問取材に積極的に取り組み、多くの実績を残しています。さらに「全国山岳博物館等連絡会議」にも尽力、この会議は現在も継続されており、博物館の関係者にも頼りにされる存在であったと聞いています。

また、委員会の例会にはいつもおしゃれなスーツに身を包み、トレードマークのアタッシュケースを提げて出席していそうです。ある委員は、「なんでも相談できる方で、委員会でも大きな存在でした。多くは語らず的確にものを言う、品のある立ち居振る舞い、すべてがかっこいい方でした。箍が外れたような思いで本当に残念です」と話しています。

読売新聞社入社後も、母校・立教の山岳部で学生の富士山雪上訓練や、春の後立山黒部合宿などに報道カメラマンとして参加し、読売新聞の紙面で大きな写真で報道。また1993（平成5）年には、自ら総隊長として若手OBや学生を率いてチョモロンゾの新ルートからの登頂に成功しました。

さらに1999（平成11）年には、まったくというほど記録のないガッシャブルムⅡ峰の中国側からの登山許可を取り付けました。そして、カシュガルからBCまでの長いキャラバンをラクダなどに乗って入り、未踏のルートからG2にアタックするなど精力的に登山活動を行なったほか、立教大学山友会（OB会）の会長も務められました。

人と山とお酒と煙草が大好きだった鰺坂さん。それ以上に周囲の人に愛された鰺坂さん、お疲れさまでした。そしてありがとうございました。

鰺坂青青（あじさか・せいせい）
1933年12月生まれ
1953年、立教大学入学、体育会山岳部に入部。
1959年、読売新聞社入社。写真部に配属。三浦雄一郎氏のエベレスト大滑降、田部井淳子氏の世界女性初のエベレスト登頂、日本・中国・ネパール三国チョモランマ登山隊、ナムチャバルワ日中登山隊など数多くのヒマラヤ登山隊の活動を報道記者して取材、報道。
1988年、読売新聞社編集委員。
1993年、読売新聞社定年退職。
1994年、日本山岳会入会。番号11661。
1997～2000年、日本山岳会理事（資料委員会担当）。
2001～2004年、日本山岳会常任評議員。
2007～08年、日本山岳会副会長を務める。

図書紹介

『狩猟サバイバル』

服部文祥・著

2009年11月発行
みすず書房刊
四六判　267ページ
定価　2520円

評判の本である。読売は読書欄で朝日では特集と有力新聞がこの本にこれほどの関心を寄せる理由はなにか。この本は奇妙な作品だろうか。というのも20歳の自意識過剰な若者の本ではないし、狩猟だけでも登山の記録だけでもないし、意志的だがスペクタクルな話でも、内的独白だけでも、ましてやケモノとの交流の物語でもない。

本書はプロローグから緊迫して始まる。文章は明晰で読者は魅了される。文体に説得力があるのは、あくまでも貪欲にプリミティブに生き抜こうとする強靭な実践の裏づけがあるからだ。全編、イメージではなく思考を生み出す言葉で語られる。

プロローグから八章・エピローグ、そして少し長いあとがきまでの構成は、サバイバル登山から狩猟に、そして登山と狩猟を融合し狩猟サバイバル登山に向かうという著者の意図が明確だ。登山だけでなく狩猟も自分だけの力でという一貫した姿勢である。

最初の鹿一頭を仕留めて狩猟が始まる第一章「巻き狩り」。第二章では、著者の言う文明の利器に頼らない自分の力で山に登る「サバイバル登山」というものを語る。そのサバイバル登山の先にあるのは、一丁の鉄砲を片手に山にこもって、獲物を食料に長期の山旅を行ない、狩猟と登山を融合したケモノを狩ることを登山の方法論にしたいと試行する第三章「単独待ち伏せ狩猟」。第四章の「猟銃」は、銃そのものと銃による狩猟というものが人の掟よりもはるかに厳しく自然の掟に従うものであるという。「解体（第六章）」は文字どおり「いのちの食べ方」であり、著者にとって狩猟は、不遜でない人間として自分が精一杯生きている手ごたえが得られる行為なのだ。

（第七章「単独忍び猟」）。そして第五章と第八章は、著者自らが風景にとけ、自我が消え、山を構成する要素になり、透きとおっていながらも存在感のある純粋な感覚を感じる、「狩猟サバイバル山行」の実践記録である。

本書は殺生に対する感傷に陥ることのない透徹した意識の高い文体が魅力だ。取り返しがつかないまでに損なわれた自然と現代生活の居心地の悪さ、狭い規定の中に押し込められた日常の怠惰を思い知らされる本である。前著『サバイバル登山家』を併せて読むこと、ドキュメンタリー映画『いのちの食べ方』を観ることをおすすめする。ただ作中に一度も「マタギ」（冬の人・狩猟を意味する）という言葉に出会わなかった。作者がどう考えているのか知りたいところだ。

（絹川祥夫）

『ニッポンの山「解体新書」』

樋口一郎・著

2009年6月発行
東京新聞出版局刊
A5判　271ページ
定価　1500円

雨で山に登れない日など、ページをめくるだけで楽しくなる本である。日本の山々をさまざまな角度から、また異った視点で幅広く分析し、その結果を多くの図表や写真を交えて綴ったユニークな書である。このような新鮮な試みがまた新たな山へと誘（いざな）ってくれる。

本書ははじめに読み方のメニューを示しているが、関心のあるどの部分から読んでもよい。なめらかで洒脱な著者の筆運びに魅せられるだろう。文中にクイズの設問を配置するなど型破りで面白い。本書の構成とその内容の一部を要約すると次のとおりである。

まず最初に「徹底分析！日本百名山」。山頂の境界、地勢図名や自然公園との関係、標高と山頂に至るルートなど、日本百名山に関するデータから分析した話題の展開が楽しい。

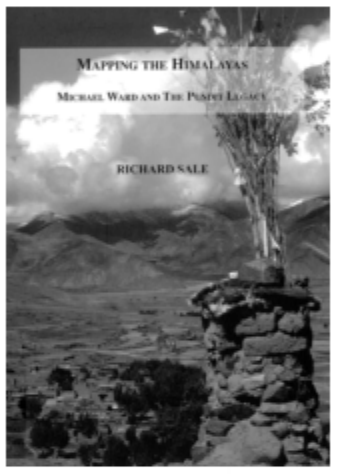
第二章は「山の大きさ　奥深さ」の探索。山の大きさは火山や山脈の分析からはかり、山の奥深さは登山口（あるいは山小屋）から山頂に至る所要時間を指標にランク分けしているのは興味のあるところ。

第三章は「山の絶対的指標　以○最高峰と中央分水嶺」。なじみの薄いテーマであるが、一定の方向での最高峰を探索、分析するもの。一方、中央分水嶺については、本会の創立百周年記念行事のひとつとして踏査したので関心を持つ人が多いと思う。

第四章は「地図を読み　地形を読む」がテーマ。体験にもとづく具体的な考察と話題がおもしろい。そして最後は「山とその周辺のあれこれ」。特定地域でのその山名にまつわる話題、鉄道列車に冠せられた名称の盛衰記など調査がよく行き届いている。

本書の多くのアイディアは、山中での空想や体験、閃きから生まれたものだと著者は記している。そして今後さまざまな角度から山々の解体が試みられ、純粋に趣味として山そのものを楽しむ学問が体系化され、構築されていくことが夢であると結んでいる。**（松家　晋）**

Richard Sale・著『MAPPING THE HIMALAYAS』



2009年発行
Carreg Ltd., UK
B５変形判　207ページ

第二次大戦勃発時、シンガポールに住んでいたマイケル・ウォードは、最後のボートで母と脱出したが父は終戦まで日本軍の捕虜だった。１９５０年25歳の時、軍医となり、51年のエベレスト遠征隊に医師として参加した。本書は、53年英国エベレスト隊初登頂のルート図を作り上げたウォードの実績と、それを可能ならしめたパンディット（18世紀中頃から英・インド測量局が僻地の地図作成のためヒマラヤ、チベットなど地図の空白地域に送り出したインド人たち）の物語である。

マイケル・ウォードは、１９５０年、中国がチベットに侵攻した結果、エベレスト遠征は20～30年代のチベット側からでなくネパール側からになると察知した。『アルパイン・ジャーナル』などの文献、写真、地図を読みあさり、エベレストの南側に登頂ルートがあることを確信した。そして51年ルート偵察に成功し、53年の英国隊エベレスト初登頂に貢献したという。

またパンディットは、19世紀にアジア奥地へ入りこんだヨーロッパ人が変装して自分達で地図作成しようとしたが危険だと諦め、その代わりにインド人に任務を遂行できるように教育を施された者たちだ。本書には、パンディットとして活躍した19名の紹介と実績が顔写真や原風景などとともに掲載されている。説明のなかで「ヘディンが、重要な中央チベットのロプ・ノール湖の面積を書いていないと批判した」。しかし、パンディットのキセン・シンが１９１０年２月発行の『the Pioneer newspaper』で「ヘディンは２度通過しており、その時、湖の水はなくなっていたが、塩膜ができていた」。また「ヘディンこそ、なぜ塩膜の面積を測らなかったのか」と反論した２ページにわたるヘディン評が興味深い。

添付地図が44枚あり、35枚はパンディットが自ら作成したものである。僻地で隠密裏に情報を集め、よくぞこのような立派な地図を作ったものである。**（南井英弘）**

図書受入報告（2010年２月）

著　者	書　　名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
松本征夫・梅木秀徳（編）	九重山法華院物語――山と人	270p／21cm	弦書房	2010	出版社寄贈
水野勉	登山家・探検家の手紙	227p／26cm	水野勉（私家版）	2010	著者寄贈
高井延幸（編）	松丸秀夫さんを偲ぶ――山仲間の文集	87p／20cm	松丸秀夫さん追悼集刊行委員会	2010	発行者寄贈
久末真紀子	世界のてっぺんに立った！――熟年女性７大陸最高峰制す	302p／19cm	北海道新聞社	2010	高澤光雄氏寄贈

会務報告

平成21年度第10回（2月度）理事会

日時　平成22年2月24日　18時30分～21時20分

場所　日本山岳会会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野澤・中山・谷川・永田・萩原各理事、深川監事、酒井・森各常任評議員

【欠席】平井監事、近藤常任評議員

【審議事項】

1・平成22年度事業計画・予算（案）（宮崎、岡部）

平成22年度事業計画・収支予算についての説明があった。会員数の減少に伴い厳しい予算案になったことを理解してほしい。会員増のためのより一層の努力をお願いする。同時に経費削減についても努力するので協力をお願いする。（承認）

2・東京多摩支部に関する支部長人事、事業計画・予算（宮崎）

2月20日設立総会が開かれ、29番目の支部として正式に発足した。初代支部長は竹中彰会員が就任。あわせて、事業計画および予算についても報告があった。（承認）

3・平成21年度後期海外登山助成金（萩原）

応募申請は2隊（12月末締切）であった。1月28日に海外登山基金審査委員会を開催し、応募の2隊①マウント・ローガン遠征隊2010（ローガン5959メートル、未踏の南西壁の初登攀を目指す）②Gurla Mandata East face Ski Expedition2010（ナムナニ7728メートル、東壁からスキーを担いで西南へ縦走）について審査し、両隊を21年度海外登山基金後期（春夏季分）助成対象登山隊とし、各隊に30万円助成する。（承認）

【報告事項】

1・プロジェクトチーム報告（藤本、神崎、成川、野澤）

新法人改革対応検討プロジェクトチーム（以下PT）、支部活性化PT、JAC－YOUTH PT、および山の日制定PTの活動・取り組み状況について報告が行なわれた。

2・平成21年度支部事務局担当者会議報告（宮崎）

1月30日、31日に開催した。本部から主として4つのプロジェクトチームの活動・取り組み状況を説明、支部からは21年度の事業計画等についての説明が行われた。

3・冬山天気予報実施報告（野澤）

今冬期は昨年12月18日から今年1月17日まで配信した。現在登録者件数1654件で、利用者から多くの感謝が寄せられている。

4・平成23年度および24年度における記念事項照会（宮崎）

文部科学省スポーツ課から特殊切手発行に相応しい行事等についての照会あった。「なし」と回答する。

5・第27回東北・北海道地区集会報告（尾上）

2月13日、14日、山形県蔵王高原で盛大に開催され、尾上会長が出席した。

6・転載許可願（宮崎）

河鍋暁斎記念美術館（埼玉県蕨市）から『新選覆刻　日本の山岳名著』から一部転載許可願があった。資料委員会許可済み。

7・山岳資料の写真撮影、雑誌掲載許可願（宮崎）

山と溪谷社からJAC所蔵の『アルプ』『山』などに掲載資料の写真撮影および雑誌掲載許可願があった。資料委員会許可済み。

8・日本勤労者山岳連盟第29回総会報告（藤本）

2月20日、通常総会が開催された、藤本副会長が来賓として出席し、山の日制定PTの説明をした。

9・東京都山岳連盟第7回通常総会案内（宮崎）

2月23日開催の案内があり、議案賛成として委任し欠席した。

10・天城三筋山風力発電建設反対と工事中止署名協力（宮崎、藤本）

天城三筋山風力発電問題を考える河津町民の会、伊豆山並み景観研究会、伊豆半島くらしと環境を守る連絡会、風車問題を考える住民の会（東伊豆町）から署名協力依頼があった。協力依頼状には風

力発電設置地域には水源涵養地域や絶滅危惧種の鳥類生息地域も含まれる等とのこと。自然保護委員会で検討する。

11・会報『山』平成21年1月号掲載記事許可願と取り下げ（宮崎）

静岡県県民部から会報『山』掲載記事（皇太子殿下寄稿記事、平成21年1月号）の使用許可願があったが、許可申請が取り下げられた。

12・放送番組のインターネット配信承諾願（宮崎）

NHKエンタープライズから昨年10月放送『ハイビジョン特集日本の名峰　劔岳測量物語――明治40年「点の記」』に使用の写真2枚（吉田孫四郎の劔岳登頂の写真および宇治長次郎氏の写真）につき配信承諾願があった。資料委員会承諾済み。

13・ウェストン卿等の写真借用願（宮崎）

帝国ホテルから上高地帝国ホテルのパンフレットに大木操撮影のウェストン夫妻、上條嘉門次、根本清蔵が写る写真を約1カ月間の借用願があった。資料委員会承諾済み。

14・2009「植村直己冒険賞」受賞者発表会案内（宮崎）

兵庫県豊岡市植村直己冒険館から2月12日に受賞者発表が明治大学紫紺館（東京千代田区）にて行なわれるとの案内があった。

15・22年度年次晩餐会の会場予約（宮崎）

12月4日予定、今年の年次晩餐会の会場として品川プリンスホテルを予約した。1フロアーで展示、講演、晩餐会を効率的に行なえることになる。

16・広報パンフレットの作成（宮崎）

広く一般の方々を対象にJACを案内できるパンフレットの素案を作成した。良いアイディアがあればいただきたい。

17・『山岳』編集報告（成川）

6月1日出版を目途に編集作業を進めている。

18・会報『山』3月号編集報告（神長）

ルーム日誌 2月

1日　総務委員会
2日　図書委員会　アルパインスケッチクラブ
3日　常務理事会　集会委員会　アルパインフォトビデオクラブ
4日　財務委員会
5日　財務委員会　図書管理委員会　九五会
8日　アルパインスキークラブ　高尾の森づくりの会
9日　三水会　アルパインスキークラブ　アルパインスケッチクラブ
10日　山想倶楽部　山岳地理クラブ
12日　アルパインフォトビデオクラブ　休山会
15日　総務委員会　資料映像委員会
16日　常務理事会　山岳研究所運営委員会　00会　アルパインスキークラブ
17日　三水会　つくも会　緑爽
18日　科学委員会　三水会
19日　山の自然学研究会
20日　山の日制定PT　多摩支部　SUN燦会　みちのり山の会
22日　支部活性化PT　JAC－YOUTH　PT
23日　財務委員会　インターネット小委員会　千葉支部　ゆきわり会
24日　理事会　自然保護委員会　麗山会
25日　01会　山遊会
26日　海外委員会

2月来室者543名

会員異動（2月）

物故

青山咸恒（3189）09・7・18
松本吉正（3375）10・2・4
小笠原三郎（4132）09・12・9
杉原八百樹（4552）10・2・10
中島　昇（5444）09・10・18
田山　勝（6561）09・12・18
長坂英一（8507）09・9・23
井上一麿（10230）10・1・28
川島淳志（10666）10・1・20
石橋文夫（11033）10・1・2
戸谷全男（11367）10・2・10
飯田　巌（13752）10・1・24

退会

中條康裕（2663）
田崎伸一（5394）栃木
小材守志（6322）栃木
垣外富士男（7988）
日比野好春（8722）岐阜
篠田勝行（11467）北九州
風間明子（12011）
千葉佳一（12770）関西
本郷佐千子（13513）宮城
廣山潤一郎（14446）宮崎

終身会員

辰己賢一（6670）

INFORMATION

◆海外登山隊クロニクル「THE EVEREST DAY」　海外委員会

当会と日本山岳協会が共催して2010年度に開く「海外登山隊クロニクル」の第1回（5回予定）。日本山岳会隊のエベレスト初登頂40周年を記念した登頂者らのトークショー。日山協創立50周年の記念行事でもある。入場無料。

日時　4月24日(土)13時30分～17時
場所　代々木、青少年オリンピックセンター
出席　大塚博美、松田雄一、松浦輝夫、平林克敏、田部井淳子、渡邉玉枝ほか
＊詳細は、当会ホームページなど

◆2010自然保護全国集会　自然保護委員会

日時　6月12日(土)～13日(日)
会場　12日　JAC104号室
13日　上智大学3号館321教室（JR四ツ谷駅麹町口前）
宿泊　スクワール麹町
日程　12日（13時より）支部報告及び討議、懇親会、13日（9時30分より16時）基調講演、シンポジウム
費用　①宿泊・懇親会＝1万1000円　②懇親会（宿泊なし）＝4000円　③討議・シンポジウムのみは無料
申込　5月15日までに、費用①②③（第1日、第2日）の区分を明記して川越尚子
〒185-0011国分寺市本多3－7－31　FAX 042－321－6059
✉kawagoejac@mti.biglobe.ne.jp）
＊申込者に詳細を送ります

バス研修「スタディ・イン・霞ヶ浦」のご案内　緑爽会共催

日程　13日　シンポジウム終了後会場発、地元自然保護団体と交流、14日　①筑波山②つくば学園都市
宿泊　土浦市国民宿舎「水郷」
費用　1万5000円（バス代、1泊3食ほか）
詳細　近藤緑（TEL＆FAX 03－3395－0326）

◆熊野古道第5回　大峯「南奥駈道」　集会委員会

大峯の前鬼から熊野本宮大社まで挑戦。自炊小屋2泊、シュラフ持参、食料分担約2キロあり、1日の歩程6～10時間。

日時　5月15日(土)～20日(木)
集合　15日13時　近鉄吉野線大和上市駅
解散　20日9時　熊野本宮町湯の峰温泉
費用　4万8000円（食事代込）
定員　15名
申込　4月20日までに、高橋聰
FAX 03－3222－0908
✉sto@orion.ocn.ne.jp）
＊詳細は集会委員会HPを参照

◆探索山行のお知らせ「世界的豪雪地帯、奥会津の地形と植生」　科学委員会

日程　5月22日(土)～23日(日)
場所　福島県只見町
宿泊　森林の分校ふざわ
内容　恵みの森（渓畔林）、松坂峠のブナ林、蒲生岳登山、独特の雪崩地形、ブナ主体の植生などを観察。地元のガイドがつきます
費用　1万5000円（宿泊、23日の弁当、バス代を含む）
定員　35名（申込み順）
集合　22日7時30分　池袋駅西口芸術劇場前（22日の昼食は持参）
申込　平野裕也（〒157-0066世田谷区成城4－33－5－202
FAX 03－3484－8968
✉jacforum@31pc-seijo.com）

◆夏の欧州アルプス登山＆ハイク　集会委員会

イタリア最高峰グランパラディーゾ、スイスの4000メートル峰アラリンホルンなどを登頂またはハイキングを計画。フランス・シャモニ2泊、イタリア・クールマイヨール2泊、スイスのザースフェー3泊の予定。

日程　7月20日(火)～30日(金)
宿泊　ホテル8泊、山小屋1泊
費用　49万円（予価）
＊空港使用料、燃油サーチャージ、旅行傷害保険・一人部屋割増・山岳ガイド料金等は別途負担
募集　20名
申込・問合　5月20日までに、野

裾野市立富士山資料館

静岡県裾野市須山2255－39
TEL＆FAX055-998-1325

MOUNTAIN MUSEUM

山の博物館訪問

入館料　小・中学生100円　高校生以上200円〔団体20人以上〕小・中学生80円　高校生以上150円・身障手帳等所持者無料
開館時間　9時～16時30分
休館日　毎週月曜日、祝日の翌日、年末年始
交通機関　車：東名裾野I.Cより約12㌔。（約20分）電車：JR御殿場線御殿場駅より遊園地ぐりんば行きにて「十里木高原別荘地管理事務所前」バス停下車（約45分）。

――富士山の火山活動や自然、富士山須山口登山道について紹介――

富士山の裾野、標高880ｍの自然豊かな十里木高原にあり、北に富士山の雄姿が望めます。当館は、日本を代表する活火山である富士山の特徴と、麓に暮らす人々のかかわりを紹介するため「富士に棲む」「富士の成り立ち」「富士に生きる」「富士を見る」の４つのテーマを設けています。また、富士山の火山活動、植物、歴史、文学芸術などのテーマにそった８本の映像を用意しており、自由にご覧いただけます。

「富士に棲む」コーナーでは、富士南麓に見られる特徴的な植物や動物について写真や図解によって示すとともに、カモシカ、キジなどのはく製を展示しています。「富士の成り立ち」では、火山活動や噴火によってもたらされた「火山弾」や「溶岩樹型」を展示し、噴火の激しさを紹介しています。「富士に生きる」コーナーでは、日本の気象観測に重要な役割りを果たした富士山測候所に関する資料や、私たちの生活に欠くことのできない地下水に関する資料を展示しています。また、江戸時代に富士山南口登山道として多くの登山者を迎えた「須山口」に関する資料を展示しています。「富士を見る」コーナーでは、地元にゆかりのある作家や歌人、芸術家を取り上げ、小説『富士山頂』に代表される新田次郎、歌人では若山牧水、川田順、水原秋桜子、芸術家では近藤吾朗（洋画家）、榎戸彪文（グラフィックアーティスト）などの作品も紹介しています。

また、併設された郷土館では、江戸時代から昭和に使われた機織の道具や山仕事などの民具が展示され、富士山麓で暮らした人々の生活ぶりを知ることができます。

崎和彦（FAX）03－3821－0825（TEL）090－8961－1866
✉nozaki_kaz@yahoo.co.jp）

◆「アメリカンロッキー　400メートル峰登頂ツアー」　集会委員会

最高峰エルバート山をはじめ３座の登頂を目指します。また、ガニソン国立公園でのハイキングや、アスペン、ヴェイルエステスパークでの散策、コロラドスプリングスではコグ鉄道でパイクスピーク山頂（4301メートル）に登ります。

日程　9月1日㈬～10日㈮
費用　48万円（予価）チャージ別
定員　15名
申込・問合　三井吉由江（TEL＆FAX）03－3451－5388
✉mtsun@cyberoz.net）

◆平成22年度　上高地山研の開所案内　山研運営委員会

本年度の開所期間は4月26日㈪から10月29日㈮を予定。ゴールデンウィークの宿泊予約は、FAXまたはハガキで事務局まで申し込んでください。

今年度は、利用者が自由に使える談話室の開設、無線LAN環境の整備などを予定しています。

❖編集後記❖

●ちょうど昨年の7月17日、東京・参宮橋のオリンピック青少年センターで開かれていた全国遭難対策協議会に出席していたときでした。新聞社や知人からケータイにトムラウシ山で大きな事故が起きたという一報が入ってきました。いかに山の事故をなくすか討議していたそのときに、大変皮肉なニュースでした。事故調査委員会が設けられ、半年かけてその報告書ができたのを機会に、節田さんに寄稿してもらいました。

●図書交換会は、毎年、楽しみな催しのひとつです。三好さんの報告にあるように、今年も懐かしく貴重な本が多数出品されました。くじ引きの競争率は高くなってしまうかもしれませんが、もっと多くの会員の参加があってもいいと思いました。

（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　778号

2010年（平成22年）3月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　尾上　昇
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社